

出張報告

北海道阿寒湖畔に分布するエゾサンショウウオ生息状況調査
佐藤孝則

2012年5月11日から13日にかけて北海道釧路市の阿寒湖周辺に生息するエゾサンショウウオの生態調査をおこなった。

このエゾサンショウウオは、環境省が貴重な両生類として『レッドリスト』のなかで「情報不足」に、北海道が『レッドデータブック』で「留意種」や「地域個体群」に、道北の枝幸町が町文化財（天然記念物）に指定した保護対象動物である。

私は20年以上前から、北海道に分布する2種の小型サンショウウオ（エゾサンショウウオとキタサンショウウオ）について生態学的調査をおこなってきた。今回の出張は、まだ誰も実施してこなかった阿寒湖北部湖畔沿いに分布するエゾサンショウウオの生息状況を調査することだった。当該調査地は、これまで人間の影響が極力抑えられてきた原生林内で、一般財団法人前田一步園財団が厳重に管理する「湖北の森」保護地域だった。林道入口にはゲートと管理小屋があり、管理人が厳重に入林のチェックをしていた。また、この林道の先の湖畔には、国指定特別天然記念物のマリモが生育していることから、管理は厳しくおこなわれていた。そのため、調査にあたっては財団職員も随行することとなった。

北海道東部の天候は、ふつう5月中旬ころは降雪がほとんどない新緑が芽吹く早春の時期だが、今回の調査は降雪と強風による3月下旬並みの寒い天気の中でおこなった。とくに調査初日の5月11日の夜は気温がわずか0.6℃で、北海道全体で最も気温が低い状況だった。

件のゲートを財団職員が運転する四輪駆動車で入り（写真1）、前日深夜に降り積もった新雪10cmの林道をしばらく走ると、エゾサンショウウオの卵囊（卵がおよそ100個入った袋）およそ30双を道路脇の側溝で発見した（写真2）。卵囊の大きさは、エゾサンショウウオの中でも大型タイプに属する個体群の卵囊だった。そのうちの7双の卵囊は天敵のトビケラ幼虫に食べられており、他の卵囊も食害の危険性が考えられ、彼らの安全な繁殖地とはなっていないかった。



写真1 阿寒湖北側湖畔の林道脇にできた側溝の流水域で、エゾサンショウウオの卵囊が確認された。この側溝には開花したばかりのミズバショウの花が咲いていた。調査では、前田一步園財団の職員が運転する四輪駆動車が使われた。

発見した時の気温は2.7℃で、卵囊が産み付けられえていた側溝の水温は、水底が4.0℃、水面が2.7℃で、水面温度は水底よりも低く、気温と同じだった。



写真2 阿寒湖北側の林道の側溝で確認されたエゾサンショウウオの卵囊。

この調査では、阿寒国立公園内の阿寒湖北側の森林域でエゾサンショウウオの繁殖場所を初めて確認し、また、産卵状況は天敵のトビケラの幼虫によって卵が食害を受けている状況で、すでに危険な状況にあることを確認した。そのほか、南側湖畔のホテル街近くを通る国道沿いでも産卵場所を確認することができた。この場所は、一般の人にも発見されやすい場所であり、採取されやすい場所であった。

また調査時（2012年5月13日午前8時30分）に、新雪の上に残されたヒグマの足跡を発見した（写真3）。足跡の状態から、前日の夜から当日早朝にかけて湖畔から林道に上り、そしてその林道上を歩いていったと考えられる。足跡の大きさを見ると、足幅が20cmほどあり、比較的大型のヒグマだった。



写真3 阿寒湖北側の林道上に残されたヒグマの足跡。新雪上の足跡から、この個体は前日夜から当日早朝にかけて林道を歩いたと思われる。

このように、ヒグマの新鮮な足跡や湯気が立ち上る新鮮な糞を見かけることは、北海道の野外調査では避けられないことである。それでも、至近距離でヒグマと目と目を向き合わせて実際に対峙したのは、学生時代に1度しか経験がない。今回の足跡は大型で子グマの足跡が周辺にはないことから、子連れグマでなく、少々安堵した。

この地域は、基本的に財団関係者や漁協関係者以外は入れない場所、ヒグマにとっても安心して行き来できる大切な行動圏だったのかもしれない。

第 249 回研究報告会 (5 月 31 日)
「アメリカ & ブラジル両伝道庁管内での宗教事情
— 海外布教の展開を考える事例として —

深谷 忠一

アメリカでの宗教事情としては、プロテスタント系のメガ・チャーチを紹介した。メガ・チャーチとは、アメリカのプロテスタント系の教会で、日曜日の礼拝に参加する人数が 2,000 人を超える教会のことであり、現在西南部のサンベルトを中心に 1,200 ~ 1,300 の教会が存在するといわれる。古いものは 1955 年前後に誕生したが、1970 年代に入ってテレビ伝道を始めてから多数の会衆 (信者) を集めるようになり、レーガン大統領が福音派教会を利用し始めた 1980 年代にその勢力をさらに拡大した。

現在もカリスマ性を備えた主任牧師を中心に各種の音響、映像、芸術の手立てを用いた非伝統的な礼拝式がおこなわれ、9 割を超えるメガ・チャーチが、教会に集う信者数を急速に伸ばしており、創設より 5 ~ 10 年で会衆 0 人から 3,000 人になる教会も少なからず存在するといわれる。昨年その中の代表的な教会が債務超過になり、カソリック教会に売却されるという事態も起きたが、他のメガ・チャーチは、その失敗に学び、すぐに教会の路線・経営方針の転換を始めた。コンサルタントなどを用いて、時代の要請に適切に柔軟に教会の様態を変えていく様は、天理教としても大いに参考にすべきだと思われる。

次に、ブラジルの宗教事情としては、同国でも三指に入る古

い町であるイグアッピ市のノッサセニョーラ・ダス・ネービス教会について紹介した。1647 年にイグアッピの町の近くのジュレイアのウナ海岸で発見されたといわれるこの教会に据えられた聖人セニョール・ボン・ジェジュース (キリスト) 像は、数々の奇跡を起こしたことで知られ、イグアッピは今もなお多くの人が訪れる巡礼の地である。この教会の 2 階には奇跡の部屋 (SALA dos MILAGRES) があり、巡礼者が受けた奇跡の証拠の数千枚の写真が大きな部屋のまわりの壁一面に張られ、コルセットや手形・足型の模型が所せましと並べられている。これは、この国の人々が神による霊教を素直に受け入れる素地があることを示すものであり、おさづけの取り次ぎを中心とした天理教の伝統的な布教が、ブラジルでさらに積極的に展開できることを示唆している。



ノッサセニョーラ・ダス・ネービス教会内にある
「奇跡の部屋」

(From page 13)

accelerated its probe of the leak, and on May 25, 2012, the steward to the pope was arrested. Taking this incident as a catalyst, the pope has been seeking to reform the various institutions within the Vatican. This reform concerns the re-examination of the various bureaucracies within the Vatican and the reform of the council. These changes are informed by the thought that as Catholicism reaches areas throughout the world and its activities develop globally, the Vatican council and the various bureaucracies must also become globalized.

Masahiko Okada — “Human Being” and “Religion” in the Contemporary World (5) Do Androids Dream of Electric Sheep?

About thirty years ago, *Blade Runner*, a movie starring Harrison Ford, depicted androids possessing the same (or even greater) functions as a human beings in terms of cognitive and physical capabilities; by doing so, it raised the question in an extremely unique way of what “humans” are and where the human species is headed.

In particular, in the climax scene depicted in the film but not in the original book, there is particularly suggestive moment when the android, who was being pursued, rescues the main character—the bounty hunter—and, in the very next instant, comes to the end of his life.

For some time, I will shift my perspective somewhat from before by discussing the theme of “what it is to be human” through the themes raised by this movie (and also its original book).

Norihito Nakao — Han Resources in Tenri University Sankokan Museum Collection (2) Shop signs from Beijing [1]

This museum contains 136 items related to Chinese shop signs, and most of these collected in Beijing in 1940. Today, many shop signs seen along the streets contain names of the product and of the store. These signs are known in Chinese as *zhaopai*. However, shop signs in Beijing in the past did not contain any letters, and these

signs were called *huangzi* (also *wangzi*). Many of the shop signs in the museum’s collection are *huangzi*.

The collection of the *huangzi* began through the suggestion of the second Shinbashira, Shozon Nakayama. Nakayama instructed Toki Fukuhara to collect the signs. However, he particularly desired signs that had been actually used in stores rather than brand new *huangzi*. After some trial and error, Fukuhara gained the cooperation of an antique dealer and was able to collect 143 signs. Later, some of these were lost but he also gained new ones, and as of 2012, there are 136 signs in the collection.

Even globally, it is very rare to find *huangzi* collected within a museum. Therefore, this collection in our museum can be regarded as a valuable one. However, many *huangzi* remains intact in China today; therefore, we can look forward to new discoveries in the future.

Saburo Yagi — The Path Towards Normalization (6) Welfare Conditions Abroad: Denmark [1]

Denmark is well-known as a large social welfare state and as a leading state in terms of standard of living. According to “Ratio of Tax Burden among OECD States,” Denmark was first at 69%. Iceland was second at 58% and New Zealand was third at 54.8%. Japan twenty-eighth at 24.6%. Also, in regard to surplus value tax (consumption tax), the rate in Denmark is currently 25% while it is 5% in Japan.

On the other hand, the tax burden ratio and ratio for social welfare, which combines the national and regional tax placed upon the citizen’s income, stands at 71.7% in Denmark. In comparison, it is 39.5% in Japan. In Denmark, each citizen contributes roughly 70% of his or her income as tax and is able to use the remaining 30% as freely disposable income. This is truly a high tax rate. In Japan, a citizen will pay roughly 40% of income in tax and keep the remaining 60% as disposable income. Japan is rated at “middle-range tax burden” in terms of tax ratio, and thus allows a higher rate of free use in comparison to Denmark.

天理大学雅楽部、国立劇場で伎楽公演

佐藤浩司

天理大学雅楽部は、6月2日、国立劇場主催第34回特別企画公演に伎楽で出演した。

伎楽は、『日本書紀』の記述によれば、推古天皇の20年（西暦612年）の条に、「百済の味摩之が、呉の国で習い覚えた伎楽を、大和の桜井に、真野首弟子、新漢濟文など少年を集めて、伝習せしめた」とある。明日香の大寺では、この伎楽の面や装束を備え、儀式に供するとともに、外国の使節の無聊を慰めるために演じられていた。天平勝宝4年（752年）の東大寺大仏開眼法要の折には、伎楽が盛大に演じられた。ところが、平安時代以降、次第に演じられなくなり、しまいには、歴史の中から忽然と姿を消してしまった。それ故、伎楽は、「幻の天平芸能」と言われていた。

それが、昭和55年（1980年）、東大寺昭和大修理落慶法要において、幻であった伎楽を復元し、演じるようになった。曲は、芝祐靖、演技は、東儀和太郎、装束は、吉岡常雄、監修は、小泉文夫、笠置侃一、企画構成は、当時NHKのディレクターであり研究者でもあった堀田謹吾氏など、当代一流の専門家によって幻であったものが現実のものとなった。この時、演奏と演技を行ったのが天理大学雅楽部である。雅楽部では、折角復元の緒についた伎楽を、より完成に近づけるため、参考にした『教訓抄』に出てくる演技全ての復元を企画、作曲を芝祐靖氏に依頼し、毎年定期公演で取り上げることにした。1983年、テーマを「酒」とした時の「酔胡王」に始まり、1990年、テーマ「力」の時の「金剛・力士」をもって一通り完成したのである。

その後、新作伎楽も制作されるようになった。薬師寺では、毎年5月5日、玄奘三蔵の取经求法の旅を演じるようになった。玄奘三蔵の中国とインド間の苦難の道中は、孫悟空が活躍する『西遊記』の物語で有名であるが、玄奘自身の手になる『大唐西域記』に基づいて物語を構成することになった。物語の構成をNHKの堀田謹吾氏が、曲は、芝祐靖氏がこれまで復曲したものを適宜使用することにし、佐藤が演出・監督を担当した。東大寺の伎楽と大きく違うのは、伎楽は本来、演技者が全て仮面をつけるころ、三蔵法師の役は素面で行うこと、また無言が基本であるところ、声明によって物語の筋が分かるように語られることである。東大寺の伎楽に対して、薬師寺のこの伎楽を、「新伎楽」と呼ぶようになった。

新伎楽「三蔵法師 求法の旅」は、玄奘三蔵院伽藍全体を使って、演じられる。伽藍の中央に八角の玄奘塔があり、南に礼門、

北に絵殿（現在、壁画殿と呼ぶ）が配置され、礼門と壁画殿は回廊で繋がっている。礼門と玄奘堂の間に4間（7m20）四方の舞台が設けられ、演技はこの舞台を中心に演じられるが、玄奘三蔵は回廊を巡って旅の困難さを表現し、礼門や玄奘塔が、舞台転換のための重要な場となる。

新伎楽、「三蔵法師 求法の旅」は、平成4年、第1作「旅立ちの段」に始まり、平成5年、「高昌国の段」、平成6年「印度ナーランダ寺の段」、平成7年「仏典将来の段」、平成8年「訳経の段」の、全5作ができた。いずれも、三蔵法師の役を、名の通った映画や新派や歌舞伎の俳優がつとめ、声明を薬師寺の僧侶が担当した。平成8年からは、また、第1作に戻り、より完成度の高いものに仕上げる努力を重ねている。その流れでいえば、平成13年（2001年）は、第5作目を再演する予定であった。しかし、玄奘三蔵院伽藍は、壁画殿に平山郁夫画伯の絵が収められて完成したとみるところから、この年は、記念の法要として、全5作を一つにまとめた、総集編を作成し、演じた。三蔵法師が天竺への留学を志し、苦難の旅を経て、ナーランダ大学で仏教の奥義を学び、多数の経典をもって、長安（現在の西安）へ戻り、訳経に従事するというストーリーである。この総集編は、コンパクトにまとまっているところから、評判がよく、その後、毎年5月5日の玄奘三蔵会大祭で演じている。

今回の公演は、2回に分けて演じられた。1回目は、午後2時から公演で、薬師寺で演じている「玄奘三蔵求法の旅」の総集編である。2回目は、午後5時から東大寺版の伎楽である。1回目の公演では、薬師寺における伎楽法要そのままに、先ず四箇法要があり、その後、玄奘三蔵の求法の旅・総集編で、玄奘の役を狂言師の茂山良暢さん、声明を薬師寺の安田契基師である。法要と伎楽2時間たっぷりの演技である。5時からの部は、まず、佐藤が伎楽の伝来の経緯と再興について解説し、伎楽が行道に始まり行道に終わるところから、行道によってそれぞれの役割を説明、最後の獅子奮迅に至る演技を行った。発売10日で全席完売という盛況で、伝来1400年に相応しい公演となった。

（7頁からの続き）

にも寄与している。その博識的な意見の交換をしたのだ。

ローマ法王は今回の事件を機にして、ヴァチカンの諸機構の改革を心掛けていたようだ。それはヴァチカンの各省の見直しと議会の改変である。今までの機構はあまりにもローマ的であって、国際的ではない。カソリックが世界に広まり、活動が世界的に展開されているのだから、その元になるヴァチカン議会、各省も国際化されなければいけないと考えているようだ。

グローバル天理
第13巻 第8号（通巻152号）

2012（平成24）年8月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 深谷忠一
編集発行 天理大学 おやさと研究所
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan